九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

B・ブーニョ他編『ポンジュ書誌』

飯田, 伸二

https://doi.org/10.15017/10034

出版情報：Stella. 19, pp.161-164, 2000-09-05. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

B・ブーニョ他編『ポンジュ書誌』

飯田伸二

昨年末，叢書「フランス作家書誌」の第18巻としてベルナール・ブーニョ，ジャサント・マルテル，ベルナール・ヴェックによる『フランシス・ポンジュ』が刊行された[1]。3人の編者はいずれも，その数カ月前に出たプレイアッド版『ポンジュ全集』第1巻の編纂にも参画しており，書誌の作成には最適のメンバーといえる。これまでに発表された雑誌や研究書の巻末書誌も重要な参照対象でありつづけるだろうが[2]，本書は質量ともにそれらをはるかに凌駕する。学術版作品集につづき本格的な書誌が出版されたことでポンジュ研究は新しい時代を迎えたのである。

書誌学的研究が網羅性を目指すのは当然だが，叢書「フランス作家書誌」は研究ツールとしての利便性にも格別の注意を払っている。巻頭には辞書のように，叢書の編集責任者による5頁もの「使用法」が「序論」に先だち付されているのも利用者への配慮の表れにほかなるまい。この配慮はまだ歴史の浅いポンジュ研究においてどの程度の効果をあげているのだろうか。その点に注目しながら初の本格的ポンジュ書誌を紹介しよう。

本書の構成は以下のとおりだ。まず「使用法」「序論」につづいて「草稿・刊本・翻訳」の目録に1章があてられる。さらに書誌の中核をなす研究業績の目録ではテーマ別に細かく分けられた12の章に1,300近い業績が分類・整理されている。この後には「今後の展望」が置かれ，巻末にはいくつかのテーマ別索引（キーワード，推薦業績，博士論文，著者・翻訳者など）が付されている。ポンジュ研究の現状からすれば，著者姓によるアルファベット順や発表年順ではなくテーマ別に研究業績を紹介する利便性については意見の別れるところであろう（ただし各章の記述では原則として発表年順が採用されている）。1980年代後半から研究論文の数が急増しているとはいえ，はたして12もの章に分ける必要があったのだろうか。ひとりの研究者の仕事をチェックするのに

細かく分けられた章をそれぞれ参照しなければならないのはたしかに煩瑣である。だが研究業績をテーマ別に分類することは叢書に一貫した編集方針であり，これにより生じかねない検索の不便を補うため，複数の索引を巻末に設けたのもまたしかりである。索引をフルに活用することでテーマ別章立てによる研究業績の分散を補ってゆくしかあるまい。

さて，実際に研究業績はどのように分類されているのだろうか。12章のうち，書誌的研究，伝記的研究，総合研究，書評，雑録（個別のテーマに分類できない研究を収録）の5テーマは叢書全体に共通の項目である。そうでなければ，本格的な伝記としてはすでに10年以上前に公刊されたジャン＝マリー・グレーズの業績しか数えることのできない現状で，伝記的研究の章を個別にもうける必然性はあるまい[3]。

残る7つのテーマ，すなわち哲学的研究，詩学・修辞学的研究，精神分析的批評，草稿研究，画家・絵画との関係，対談，書評は，編者3人の意図を直接反映した章立てといえる。彼らにとり，これらの分野こそが現状ではポンジュの世界に分け入るためにもっとも重要な切り口ということになる。なかでもとりわけ評価したいのは，ポンジュ作品にかんする出版直後の書評を集めた章だ。この種の試みはポンジュ書誌では初めてであり，そこから貴重な情報をうるのは，受容史や社会学的考察に関心をもつ研究者だけではあるまい。とはいえ，いくつかの章は業績の数において著しい不均衡を呈している。たとえば精神分析批評には，全業績の60分の1にも満たぬわずか20点しかおさめられていない。しかも編者が「特に興味深い」と評価する研究は皆無なのである。それに対して詩学・修辞学的研究には300近い業績が集められている。これまでのポンジュ研究の一翼が，テーマ批評に精神分析的アプローチを取り入れてきたジャン＝ピエール・リシャールや，彼の指導を受けたミシェル・コローらによって担われてきた経緯を思いおこすなら，たとえば「精神分析批評」に代えて「テーマ批評」の章を設けていれば質量両面での偏りがかなり是正できたのではあるまいか。またポンジュの対談が研究業績に分類されているのにも違和感を覚えざるをえない。たしかに対談の多くはポンジュ作品への最良のガイドではあるが，その一部はプレイアッド版『ポンジュ全集』の第2巻に収録の予定であることからしても，むしろ「草稿・刊本・翻訳」の1項目に納められるべきであったろう。

本書では，いくつかの例外をのぞき，収録アイテムすべてに簡単なコメントとキーワードが付されている。また編者が「特に興味深い」と評価した研究52点には眼鏡を模したマークが付されている。これも叢書全体に一貫した編集方針である。公刊業績が年々増加の一途をたどるなか，歴史の比較的浅い研究分野においてさえ先行研究のすべてに目を通すことは事実上不可能になりつつある。こうした状況にあって叢書の一大目標は，読者が自分のテーマ・関心に対応したエッセンスを効率的に引き出すのを手助けすることにある。それゆえ編者による価値判断は書誌の重要なポイントだ。キーワード索引とコメントを併読することにより，まず第一に読むべき研究書・論文が自分の関心に応じてある程度網羅的にリスト・アップできるメリットは大きい。だが同時に，いかにポンジュ研究のトップランナーによるとはいえ，その価値判断に過度に頼るのは慎むべきであろう。眼鏡マークの選択が外国研究者の業績にも広く開かれているのは評価すべきだが，カミュやデリダの論考にマークが付されていない点に伝統的アカデミズムの限界を感じるのは書評者だけではあるまい。また業績の内容にかんしてももう少し突っ込んだ記述をしてくれればと感じる箇所も少なくない。

いっぽう「草稿・刊本・翻訳」の章で，未公刊資料にかんする情報が掲載されているのはありがたい。特に詩人の遺族が所有・管理している資料の全体像が，概略的とはいえ初めて明らかにされたことの意義は大きい。また国立図書館やドゥーセ図書館，IMECなど，公的機関に保存されている草稿類については，請求番号ごとに概要が紹介されている。これも資料調査の大きな手助けとなろう。

ここでは主として利便性の観点から書誌『フランシス・ポンジュ』の長所と問題点とを論じた。書誌の刊行でポンジュのテクストや先行研究に対する見通しが飛躍的に改善されたメリットは計り知れない。本書を参照することで，多くの研究者が情報収集作業の合理化をはかったり，新たな研究へのヒントを得ることだろう。構成についていくつか異議を唱えたが，実のところ問題は叢書全体の編集方針とポンジュ研究の現状との齟齬に起因する場合がほとんどなのである。書誌とは研究のあり方を映す鏡である以上，この構成の不均衡は，今日までの研究の偏り（特に伝記的・実証的研究の乏しさ）を明らかにしている点で，それ自体ひとつのメリットと考えられなくはない。叢書に収められた他

の書誌とならんで本書も5年ごとに新たな情報をもりこみ改訂される予定だが，多様な観点からテクストに問いかけ，その成果として構成上の不備を徐々に解消してゆくことも，われわれポンジュ研究に携わる者の課題といえよう。

註

1）Bernard Beugnot, Jacinthe Martel, Bernard Veck, *Francis Ponge*, Paris–Rome : Éd. Mémini. coll. «Bibliographie des écrivains français», 1999, 270 pp.

2）これまでの主な書誌を挙げておこう。まずはポンジュの著作にかんする書誌——Claire Boaretto, «Bibliographie des textes de Francis Ponge parus en volumes jusqu'à ce jour (mars 1926–octobre 1976)», *Bulletin du Bibliophile*, 1976–III, pp. 266–292 ; Jean–Marie Gleize, «Bibliographie des œuvres de Francis Ponge», *Les Cahiers de lHerne*, n° 51, 1986, pp. 596–615 ; Michel Collot, «Essai de chronologie des textes de Francis Ponge», dans *Francis Ponge. Entre mots et choses*, Seyssel : Champ Vallon, coll. «Champ poétique», 1991, pp. 245–264. つづいて研究業績を対象とする書誌——Bernard Beugnot et Robert Mélançon, «Fortunes de Ponge (1924–1980). Esquisse d'un état présent», *Études françaises*, vol. XVII, n° 1–2, 1981, pp. 143–171 ; Bernard Veck, «Bibliographie», dans *Francis Ponge ou le refus de l'absolu littéraire*, Liège : Mardaga, coll. «Philosophie et langage», 1993, pp. 175–191.

3）また，自伝的作品とはいえフィクションの要素が濃厚なポール・オースター『孤独の発明』からの一節が紹介されているのに対し，『文学とは何か』『火の部分』『来るべき書物』でサルトルやブランショがポンジュを論じている箇所は雑録にさえ収録されていない。たとえオースターの描き出す詩人像が魅力的でありポンジュ詩学の本質を衝いているとはいえ，こうしたコーパスの処理の違いには疑問を感じざるをえない。